

福祉のまちづくりにおけるインクルーシブリサーチの可能性

森口弘美（京都府立大学実習助教）

1. 自己紹介

2. 調査① みんなが行きたくなるカフェってどんなカフェ？

「障害のある人から学ぶまちづくり協働研究—障害のあるリサーチャーと学生サポーターの育成—」

助成：公益財団法人三菱財団／2015年11月～翌3月／於：奈良女子大学ほか

▼そもそものきっかけ

・インクルーシブ・デザイン

さまざまな背景やニーズをもつ人たちが、ものづくりやサービス提供などのデザインプロセスの上流に参加することをめざす手法 → 個性的でユニークなもの

・日本の先行研究の少なさ

→ 当事者主体の自己決定支援モデルの開発をめざして、知的障害者をインタビューの参加者として位置付け分析結果に調査参加者の意見を反映させた研究（笠原 2006）

→ 当事者の参加による福祉サービス運営・評価のプログラム開発をめざして、ガイドヘルプ事業の利用者に知的障害のある当事者研究員がインタビュー調査を行うことを試みた研究（茨城 2007）

・法人理事を務める事業所からの相談

▼DVD 15分

▼「参加」がキーワード

- ・調査に協力する人の主体的な参加
- ・多様な人が参加するモデル（例：外国人や子ども）
- ・「参加」について、私たちが学ぶ

▼実は、海外ではたくさん実践がされていた！「インクルーシブリサーチ」

3. 調査② これから社会に出る人たちが取り組む「私たちの暮らし」調査

2017 年 2 月 20~21 日／於：奈良女子大学

・当初は、差別の体験について話し合いたいと思っていたが・・・

▼取り組み内容

1 日目	これまでの暮らしのなかで困った場面・困った経験を出し合う。
2 日目	困ったことの解決のためのアイデアを出し合う。

▼実際に話し合ったテーマ

	1 日目に出た課題から	2 日目に話し合ったテーマ
A	今日の話合いがストレス!?	どうすれば話しやすくなるか、どんな人だったら話しやすいか、どんな質問だったら答えやすいか
B	電車の駅での表示がひらがなで書かれていない	漢字が読めない人が、電車の駅をスムーズに使えるようになるにはどうすればいいか、何があったら助かるか
C	電車に乗っているときに、知らない人からじろじろ見られる	どうすれば、知らない人からじろじろ見られるようなことがなくなっていくか

B：「ひらがなのパンフレットを置いてもらう」

「漢字を撮ったらひらがなにしてくれるアプリ」・・・ etc.

▼研修や授業への展開の可能性

資料参照：合理的配慮について一緒に考えるワークショップ

→理路整然と話せない人こそ、講師役が務められる！

4. インクルーシブリサーチの視点と可能性

1) 経験を積むことで上流に参加していく →メカニズムにアプローチする

2) 参加の形はさまざまでいい

うまく参加できないときは、発想を変えてみる = 私たちが変わってみる (=社会モデル)

例：アートミーツケア学会での試み

3) 仕事としての可能性

・研修

障害者差別解消法 (2016 年 4 月～)

差別の解消と合理的配慮

- ・障害者権利条約を根拠とした社会参加（とりわけプロセスへの参加）

第4条：一般的義務

- 3 締約国は、この条約を実施するための法令及び政策の作成及び実施において、並びに障害者に関する問題についての他の意思決定過程において、障害者を代表する団体を通じ、障害者と緊密に協議し、及び障害者を積極的に関与させる。

第33条：国内における実施及び監視

- 2 締約国は.....この条約の実施を促進し、保護し、及び監視するための枠組みを自国内において維持し、強化し、指定し、又は設置する。.....。
- 3 市民社会（特に、障害者及び障害者を代表する団体）は、監視の過程に十分に関与し、かつ、参加する。

5. インクルーシブリサーチとは

多様な人が調査研究のプロセスの上流に参加することで、メカニズム（望ましくない悪循環）を変える

1) 「まちづくり協働研究」という名前にした意図

障害者福祉計画を策定するための実態調査 →国／都道府県／市町村

調査項目は適切か？／本当のニーズをつかめるか？

Ex) 「収入を知りたい」

当事者からかけ離れた専門家が調査をする→専門家側からみた実態しかつかめない→当事者の実感にもとづいたサービス提供が実現できない

2) 障害のある人が調査に触れる機会がこれまでどれだけあったのか

私たちは徐々に触れる機会が増えていく（とりわけ高等教育をとおして）。

日本の障害者の高等教育の現状 ⇔ インクルーシブリサーチの立ち遅れ

・・・でも、実は私たちも、調査って身近ではない！？

【参考文献】

- ・笠原千絵（2006）「知的障害者福祉研究における参加型調査の課題—調査プロセスの実際とその批判的考察」『社会福祉実践理論研究』15, 15-25.
- ・茨木尚子（2007）「知的障害のある人が参加する調査研究活動の実際と課題—知的障害者ガイドヘルプ事業調査研究の実施から」『研究所年報』明治学院大学社会学部附属研究所 37, 71-79.
- ・森口弘美・井口高志・太田啓子・松本理沙「調査活動『みんなが行きたくなるカフェってどんなカフェ？』—インクルーシブリサーチの観点からの検討—」（研究ノート）同志社大学社会学会『評論・社会科学』123号（2017年12月）

